

一番茶句会報

2018 平成三十年
四月 月号 号
(591)

第八回「一番茶総会・吟行句会」大会記

前田 恭子

四月十五日(日)静岡護国神社で開催。吟行地の静鉄沿線の華陽院、清水寺、伝馬町商店街、護国神社など、各自で回り、昼食を済ませてから集合。総会に先立ち十一時から神事に一部参加。前夜から風雨が激しく、当日も天候が心配されたが、運よく朝九時頃には雨も上がり、絶好の日となった。参加者は、二十六名であった。社務所二階で定刻に総会を開会。花村同人の進行と開会挨拶に続き、磯田会長の挨拶、次に前年度事業報告と今年度事業計画を山本同人が説明、決算報告と予算案について会計の西川さんよりの説明、監査報告の後、全員一致で承認された。連絡事項として磯田会長より、五月から栗田顧問をお迎えして静岡句会が発足する旨、その内容の説明があり、また、大分県日田市において開催の「水の森全国俳句大会」で栗田顧問の講演があり、選者もされる旨の紹介があり、両句会への参加を奨励された。

続いて吟行句会は佐藤博子さんの進行。三句投句、三句選、同人五句選の披露を佐藤、多々良、前田の幹事が行い、十五時四十分を終了した。雨上がりの瑞々しい杜を鑑賞しながらの会で、若き英霊を祀る遺品館の見学など、戦争の悲惨さに想いを寄せ、改めて平和の尊さを思うことができた一日であった。

当日の作品

樟若葉御社の森ふくらめり 吉田 明美
七万の著莪の花咲く神の杜 立川まさ子
遺したる水筒の穴春悲し 山本 法子
水かけて花屑流る献水碑 齊藤真理子

春かなし勲章並ぶ遺品館
館埋むる兵士の遺品燕来る
母上と出征の遺書冴返る
春ともし角ばりし字の遺言書
出征の凜凜しき遺影松の芯
献燈の並ぶ参道春落葉
花屑の桃色敷いて献水碑
着水の鴨花屑を散らしけり
長閑なる鶏の声境内に
大空に大楠芽吹く神の庭
境内の低き蒲公英家族づれ
若葉風吹き抜くる宮祝詞受く
新緑に巫女装束の赤映ゆる
春落葉踏んでぼろ市右左
本殿の大きそり屋根風光る
楠若葉雨の洗ひし思惟仏
青光る社の屋根や芽吹山
足元の微かな香り春落葉
黒揚羽水子地蔵にまつはれり
遺族会への案内状や風光る
葉桜や巫女神殿を走りをり

中村 たか
磯田 なつえ
花村 富美子
磯田 秀治
坂本 操子
佐藤 博子
西川 満寿美
伊坂 壽子
土本 かず子
橋本 紀子
佐藤 ハル
池村 明子
大森 弘子
松本 恵子
多々良 和世
松永 和子
下河辺 美乃里
前田 恭子
辻 桂子
関根 幸子
大村 泰子

・私の好きな句・二月号より・

葦原へ分岐いくすぢ春の川
穏やかな春日浴びをり貝ボタン
二ヶ月の風強き日や兜太逝く
啓蟄や鉢の下よりダンゴムシ
咲き誇る花には花の心あり

中村いく代

磯田 なつえ
小林 智子
坂本 操子
西川 満寿美
勝又 寛樹

もちの実句会

No. 554

H・30・4・21

水草生ふ湧水砂を押し広ぐ

磯田 秀治

石楠花のつぼみ膨らむ山の宿

長串の塩焼山女かじりをり

伊坂 壽子

うぐひすの鳴かぬ一日の暮れにけり

青銅の屋根の神社や初燕

無住寺の桜吹雪に立ち尽くす

塩瀬 初子

清明や君を待つ間のカフェテラス

島へ行く新任教師春の虹

木の芽風朝練の声高らかに

山本 法子

白白と明けゆく空や河鹿笛

春落葉澱みし中に亀の首

骨董の占むる参道暮の春

若葉萌ゆ宮に兵士の遺品館

花祭竹千代の祖母眠る寺

神鶏の長き尾羽へ若葉風

※塩瀬初子さん、新入会。

(山本法子報)

瀬名笹百合句会

No. 421

H・30・4・16

ミステリーバスのみやげは春大根

大石ひさを

飲み会に向かふ頬打つ春疾風

花疲れ一人前のよき日かな

初蝶へ朝の日差しの強きかな

蒲公英の丘に見下ろす駿河湾

庭隅の蓬を摘みてチヂミ焼く

漆畑 一枝

遅桜らしき一本大学舎

葉桜となる土手の道犬を連れ

春昼や水面に丸き鯉の口

しゃぼん玉消えたり猫の鼻先で

富士晴の野良に雲雀の急降下

笹百合のかぼそき花よ谷間に

花吹雪追はれる孫と追ふ孫と

花ふさの重みに揺れし八重桜

指先が届きさうなり春の山

川はさみ手を振り帰る新入生

山藤を揺らして堰の水しぶく

白木蓮散れり歩道に隣家にも

大森 弘子

前田 一三

片井 克子

松本 恵子

(松本恵子報)

安西句会

No. 344

H・30・4・1

ベランダに花を買ひ足す穀雨かな

菊山 静枝

無住寺に人の気配や桜どき

大学の裏の日溜り梅白し

ハンガ―の赤青黄色鴉の巢

佐藤 博子

山車を引く一万七千歩のねり

子に追はれ車の下に仔猫鳴く

あかがねの街のガス灯風光る

立川まさ子

少女期の遊びし社花盛り

町並に吾が生家跡春霞

花曇祭りばやし響く路地

春霞役目を終へしテレビ塔

春風を胸いつばいに昼休

辻 桂子

花どうだん鈴ふれあひて花こぼす
すみれ草やはき日差しの古墳山

奥宮に友と浴びたる花吹雪
切長の眼の似たる武者飾る

花吹雪赤子とくぐる赤鳥居
糸桜商店街の地藏尊

青空へ辛夷の白を放ちけり
うぐひすや神羅万象光る中

はくれんの花すぐ風の的となり
春光や玉串捧ぐ地鎮祭

奥宮に桜散りつぐ静寂かな
四阿に憩ふ夫婦や百千鳥

橋本 紀子

松永 和子

吉田 明美

坂本 操子

(佐藤博子報)

はとり句会

No. 323

H・30・4・13

谷津 政子

藤田 幸子

多々良和世

新川 晴美

からみ合ふ蔓太太と藤の花
春まつり柚の女の藤娘
露味噌や晚酌の盃追加せり
花筏分けて進むや手漕ぎ舟
留守の家の弛ぶ石垣蜥蜴の子
抱き上ぐる幼の髪へ若葉風
なまこ壁続く城下や松の芯
花の雲白帝城のやはらかに
常念の尾根の残雪風やさし
胡麻和の芹シヤキシヤキと夕の膳
庫裏の窓開きてゐたり入彼岸
葉桜や玉露の里にだれもゐず

春寒し麻酔の醒めぬ友見舞ふ
遠足の子らの飛ばすやブーメラン
花の下男じよろうの練り歩く
満開の桜の大樹園舎跡

街角にハープの調べリラの花
塗替への壁の白さやかげろへり

夕風やかさかさ揺るる花馬酔木
靄深き朝小綬鶏の高鳴けり

片隅に古きオルガン甘茶寺
竹千代の手植の蜜柑つぼみ抱く

卒業子声変りして胸厚し
夜桜へ乱打の太鼓遠巻きに

花冷や三つの会のはしごせり

大村 泰子

神尾 知代

山本 法子

磯田なつえ

花村富美子

(磯田なつえ報)

樟ヶ谷句会

No. 152

H・30・4・26

斎藤真理子

土本かず子

下河辺美乃里

磯田 秀治

音させぬ巫女の玉串春の舞
泥付きの野蒜片手に家路かな
春落葉踏んで尻餅つきにけり
春耕や夕日を背に老夫婦
電飾や函館山は冴返る
ドクターイエロー春の夕日へ北進す
谷川の水の勢ひ山笑ふ
大空へ堂の棟上げ紫木蓮
そよ風や二畝だけの麦青む
樟若葉手すり頼りに坂登る
御神供の氷砂糖や樟若葉

病窓の四角の空へつばめ来る
鯉幟類いっばいのカレーパン
兄ちゃんは僕のヒーロー葱坊主
初鯉初競りの声弾け飛ぶ
売出しの樹木葬墓地風青し
若葉せる兄の遺木へけらつつき
牧の原台地挙りて茶の芽立つ
ぼる市や並ぶスプーンに若葉光
広芝に鴉弾むや鯉のぼり

番町句会 No. 58

H・30・4・20

飴色の艶やかなるや甘茶仏
オレンジの百合と見紛ふちゆうりつぶ
花散るや若き兵士の遺品館
沈丁花香りほのかに夜が来る
春渚夫を亡くせる友と立つ
のみの市樟の若葉の明るさよ
指先の雫の光り甘茶仏
つばくらめ大社の杜を飛びかへり
産土神のポンプ井の錆桜咲く
真つ黒な蝌蚪の大群水たまり
一服の甘茶いただく小さき杓
燕の巢露天風呂への出入り口
甘茶仏小指の先のしづくかな
SLの木造の駅飛花落花
松の花家康公の祖母の墓
祝詞聴く宮にさざめく恋鴉
従軍の看護婦像へ散る桜

中村いく代

塩瀬 初子

磯田なつえ

中村 たか

(下河辺美乃里報)

前田 恭子

関根 幸子

池村 明子

八木 洋子

佐藤 ハル

磯田なつえ

山本 法子

(前田恭子報)

かんがるー句会 No. 116

H・30・4・12

花吹雪異国の少女助手席に
旅の子に振る舞ふ玉露花の庭
囀の近きベランダ濯ぎ物
初出社まだ履き慣れぬ皮の靴
桜餅子と分け合へり帰り道
大きめの制服眩し風薫る
少年の寝惚け眼や和布汁
ゆつくりと母に声掛け春深し
裏庭の春子を籠に休みの子
黒豹の金の目に降る桜かな
夜桜や旅人を待つ無人駅
桜貝足裏の砂のくすぐりぬ
黄砂来る予報やくさめ続けさま
犬二匹転がり込めり菜の花へ
食卓につぼむ蒲公英束の間に
乳房揺れ髪乾かしぬ磯焚火
春潮に向かひて二人弓をうつ
芽ぶき待つ鉢にさしたる柳かな
婆ちやんのでかき牡丹餅彼岸かな
春疾風一番鶏の声揺らぐ
風車お面やさんの端つこに
竹串の卓にはみ出す焼山女
老夫婦守る山の湯つばくらめ

西川満寿美

渡辺 公美

小林 智子

中村いく代

杉山 美波

勝又 寛樹

塩瀬 初子

磯田なつえ

(小林智子報)

レモン俳句教室

No. 36

H・30・3・13

富士見ゆる広き砂浜桜貝
 花の雲駆け出しさうな少女像
 千代紙の小箱にうすき桜貝
 春霞伊豆七島の二つ三つ
 色薄き農婦のうどん花の寺
 子に乗せて桜伝ひに塾通ひ
 花の下大道芸の綱渡り
 園内を巡るトレイン花吹雪
 風光る女子学生の長き脛
 車椅子並べ談笑花の下
 真つ白な船影ひとつ春の海
 まず舐むる嬰のつぶせり紙風船
 孕み鹿柔らかき葉を喰べてをり
 万歩計バックの中に風光る
 春筍の煮物ひと鍋クラス会
 子のマークつけし風船保育室

松永 和子

池村 明子

西川満寿美

前田 恭子

八木 洋子

斉藤真理子

榎戸万里子

磯田なつえ

◇兼題「桜貝」「母子草」「風船」で作句。(「俳句」H30・3月号「類似季語の
 使い分け」を読む。省略の視点から実例句の推敲 (前田恭子報)

向日葵句会

No. 31

H・30・4・11

下萌に子らの歓声鬼ごっこ
 吊橋の下に彩る芝桜
 陸奥の夕日に染まる斑雪山
 春休児にもてなさる玉子焼
 海を向く大滑走路風光る
 交番は墓苑の中や養花天
 つつがなく古希を迎ふや花苺
 入寮の大き荷物や鳥曇

立川まさ子

土本かず子

橋本 紀子

佐藤 博子

団子屋を探して友と春の昼
 うぐひすや朝食あとの飲み菓
 奥信濃出湯の宿の春炬燵

紺碧の空の天守や風光る

啓蟄のマンホールより人の声
 入院の娘に添ひてゆく花曇

多々良和世

坂本 操子

(佐藤博子報)

静岡同人句会

No. 87

H・30・4・7

退院の張りある声や木の芽時

東西へ別るる暮し弥生尽

中空に天城連山春霞

富士全容霞む裾まで拝みけり

春蟬の二声三声朝の町

山の子のふらここ空へ飛び出せり

富美子

法子

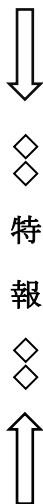
操子

たか

恵子

なつえ

(山本法子報)



静岡句会

栗田やすし顧問ご指導

☆日 時 六月五日(火)午後六時一五分

☆場 所 番町市民活動センター大会議室

☆ご指導 栗田やすし顧問

☆投 句 三句(5/29迄に山本法子へ葉書で)

☆清記集を当日五時四十五分以降に会場で配布するので、選句を句

会前に済ませること。

☆幹事・世話人 山本法子 花村富美子

私の一句

下河辺美乃里

てんでなる猫のポーズや花菜風

美乃里

特に猫が好きというわけではない。岩合光昭さんの撮る猫は、かわいらしかったり、したたかだったりする。数匹集まっても、あちこち異なる方向を見ていて興味深い。

わが家の回りにうろついている黒猫がいる。どこの家の猫か知らない。隣家との間を通して外階段を上り、倉庫の屋根へ飛び移る。ある時、畑へ行くと笹竹の辺りからがさつと音がした。黒い尻尾が見えたので、この黒猫とわかった。

配布物を持っていく家の軒下には、多い時十匹近く寝そべっている。目で私を追ってくるが、動かさず鳴きもせず、この人は何者だろうと窺っているかのような。ここには黒猫はいない。

親戚で飼っていた猫は、静かで気がつく側と側にいたり、置物のように柵の上などに座っていた。十数年の長生きであった。

句に詠んだ猫たちは、藁科川牧ヶ谷橋の土手付近が住処である。橋の下の住人に懐いているのかもしれない。咲きだした菜の花の土手を好き勝手に歩いたり、うずくまっていたり、寝ていたり橋を渡る時、目にする光景である。句の良し悪しは別として、ずっと詠めた自分としては気に入っている句である。

猫足、猫舌、猫の額、猫に小判、猫の手も借りたい、猫も杓子も、猫を被るなど時に使う言葉や諺がある。猫の特徴や習性、古くからの人と猫の関わりが深さが感じられて面白い。

それゆえ、たまには詠んでみたくなる句材である。これからも、視野を広め、楽しい句作りを続けて行こうと思っています。

季語にまつわる思い出

山本 法子

河鹿

三月下旬、初夏のような日差しに誘われ、藁科川沿いの土手を夫とウォーキングした折、せせらぎの音に混じって河鹿の声があった。初河鹿！

歳時記によると、河鹿は夏の季語。湖や溪流などのきれいな水に生息する蛙。雌は七く八センチ。雄は半分位。すべての指先に吸盤があり、岩に吸いつき早瀬にも流されることはない。雄はフイーフイーと口笛のような美しい声で鳴くと書いてある。

新聞に住んで五十年近くになるが、初めて河鹿の声を聞いた時の感激を忘れない。何の声なのかと、大先輩の矢野愛乃さんに伺ったところ、蛙の仲間で河鹿蛙と言うのよと教えてもらった。泊まりに来た母も初めて聞いた時「まるで子守唄ね」と言って大喜びだった。

遠河鹿子守唄ねと母言へり

法子

忍冬の花

スイカズラ科の半常緑性木本。葉は冬でも枯れないので忍冬と呼ばれる。初夏に細い筒形の花を咲かせ芳香がある。吸うと甘いので「吸葛」の名がついた。(歳時記より)

吸葛の花も私は大好きな季語。多感な高校生の頃、勉強するでもないのに、机に向かっていているのが好きだった。初夏の夕闇迫る頃、窓から微かに匂う忍冬の花の香に、うっとりしていたものだった。「法子は変な子だね」と母は嘆いていた。これも懐かしい思い出の一つ。

墓地隅の無縁仏へ忍冬花

法子

【予告】 第四回 静岡・関東支部合同鍛練会（素案）

- ①日時 平成三〇年七月一〇日（火）
- ②吟行地 富士宮浅間大社、富士山世界遺産センター、
村山浅間神社（開山神事）
- ③句会場 富士宮駅前交流センター 会議室1
- ④日程 静岡駅（8時）↓新富士駅（9時）↓浅間大社（9時半）
見学（世界遺産センターを含む10時半まで）↓村山浅間
神社11時（水垢離・入山式・護摩焚見学13時頃まで）
↓駅前交流センターにて句会（13時半～16時半）↓
新富士駅（17時）↓静岡駅（18時）
- ※懇親会を付けると2時間遅れ（駅前ホテルで）
- ⑤備考
・タイムスケジュールはバス会社の見積りが出てから確定する。
・静岡駅、新富士駅にて関東支部と合流する。
・移動は中型バス（27名乗）をチャーター
・昼食は山開き神事を見ながら（お弁当・お茶）句会で茶菓子
- ⑥従来と変更したこと||基本を日帰りにした
・宿泊希望は富士宮駅前 くれたけインプレミアム
4800円～10000円
・翌日吟行は路線バスで田貫湖、白糸の滝、朝霧高原
- ⑦費用 7000～8000円位

【予告2】 第2回幹事会の変更

7月14日（土）から7月15日（日）9時半～正午に変更

「自選力を高めるために」—動詞の活用について③—

- ① 今回は下二段活用の動詞です。

例 湯船出て見つむる窓に寒の月 ひさを（名詞 助詞 動詞）
動詞「見つむる」は口語では「見つめる」で広辞苑は「見つめる」で引きます。
み・つ・める（見詰める）〔他下一〕、**文みつ・む（下二）**とあります。

例「みつむ」という動詞は

みつめ（エ）ず （みつめ+ず=打消しの助動詞） …未然形
みつめ（エ）て （みつめ+「て」「たり」用言に続く） …連用形
みつむ（ウ） （文の終り） …終止形
みつむ（ウ）る+時（みつむる=体言や「なり」等続く…連体形
みつむ（ウ）れ+ども（みつむれ+ども=助詞） …已然形
みつめ（エ）よ （命令する） …命令形

※「みつ」は語幹といて変わらない部分、**太字**の部分は語尾で変化する部分です。

め・め・む・むる・むれ・めとめ（エ音）とむ（ウ音）で活用しています。エ音とウ音で活用する動詞を下二段活用といいます。

- ② 打消しの助動詞「ず」をつけてみる方法ですと、その活用語尾がエ段なら下2段活用です。（消えず、溢れず、零れず、流れず、見上げず…どれもエ音）
- ③ 先月の上二段活用と今回の下二段活用の動詞に要注意、この二種類の動詞が体言に続くとき、すなわち連体形の使い方を間違えないようにすれば、文法の誤りをかなり減らすことが出来ます。“ず”を付けた時活用語尾がイ段、エ段の時は辞書で確かめるといいですね。

「一番茶」作品鑑賞（二月号）

磯田 なつえ

寒明や空より碧き駿河湾

伊坂 壽子

真つ青に晴れ渡った寒の明け。その空を写す海も真つ青。しかしその青さは海の方が優っている。ジツと見つめて得た感慨です。

寒暁に結ぶ引越しの塩むすび

坂本 操子

取り壊す家にも撒けり追儼豆

坂本 操子

一句目「引越しの塩むすび」が、その朝の慌ただしさを物語っています。二句目の「追儼豆」は「取り壊す家にも」で長年住み慣れた、亡きご主人と建てられた家への愛惜の念が籠っています。想いを物に托し、適切な写生の言葉で表現された即物具象の佳句です。

板の間に声はね返る寒稽古

多々良和世

中七の「声はね返る」の写生が寒稽古のピーンと張りつめた空気と緊張を伝えていきます。そして何も触れる言葉がなくても、紅潮した頬や赤らんだ足先、手の甲などが見えてくる感じです。俳句は書かれていない景をどれだけ想像させることができるか、が大きな魅力ですね。

春日差うす紅色の鳩の首

前田 恭子

庭に來るキジバトでしょうか。首の僅かな紅色に気づかれた作者。春の明るい日差に紅色が美しく映え、感動を覚えた様子が伝わってきます。

風花のビルの足場に舞ひ登る

榎戸万里子

中七「ビルの足場に」に意外性がありました。田舎に住んでいるせい、こんな風景は新鮮でした。下五は「舞ひ上る」の方がいいのではないかと思います。

☆・☆・☆・あとがき・☆・☆・☆

天候不順なこの頃ですが、日の当たらない我が家の庭にも、都忘れ・苧環が咲き、鶯草も芽を出しました。

十二月から編集に関わるようになり、やっとな慣れてきました。急に文章を書くことが増えた気がします。辞書で文字を確かめることも多くなりました。

一番茶総会・吟行句会が終わり、一息ついた感じですが、時は止まらず次々と成すべきことが待っています。皆様のご協力をお願いいたします。

（美乃里）

平成30年「一番茶」句会一覧

句会名	開催週	開催場所	開催時間
もちの実	第3土曜	杓子庵（新聞）	13時
瀬名笹百合	第3月曜	瀬名中央町会館	13時30分
安西	第1日曜	番町市民活動センター	13時30分
はとり	第2金曜	花村富美子宅（羽鳥）	13時
樟ヶ谷	第4木曜	杓子庵（新聞）	13時
かんがるー	第2木曜	杓子庵（新聞）	13時30分
番町	第3金曜	番町市民活動センター	18時30分
静岡岡	第1火曜	番町市民活動センター	18時15分
向日葵	第2水曜	番町市民活動センター	13時30分
レモン俳句教室	第2火曜	番町市民活動センター	9時
同人	第1土曜	杓子庵（新聞）	13時

一番茶句会報 4月号（591）

平成30年4月30日 発行

発行責任者 磯田なつえ（☎054-278-7443）

〒421-1201 静岡市葵区新聞458

編集部 山本 法子（部長）中村たか（校正）

操子・美乃里・博子・明子・和世

印刷 番町市民活動センターにて印刷